

§はじめに§

大学の公共性という視点から社会貢献をとらえていくなれば、美術大学という環境から生じる本質的な特徴とそれらの多種多様な連関を見出すことができる。

以下、各セクションが見出した、あるいは抽象された内容は、当然のことながら美術・芸術・文化・情報に依拠するといった共通の方向性を持ちながらも、個々のセクション独自の構造をも現す結果となった。

また、今回の分析には含めなかったが、社会への発信としては各学科、各学科間の協力、さらに教員の個人的なものまで視野に入れるならば、そこに数多くの他大学、多機関、多分野との共同研究、展覧会や講演会等々、多数の催事、イベントを行なって来た。

絵画学科油画専攻の南多摩病院における待合室の壁画制作「絵画が及ぼすヒーリング効果に関する研究」や同学科版画専攻の「東京国際ミニプリントトリエンナーレ」、彫刻学科の聖路加病院における「木との語り展」、生産デザイン学科テキスタイル専攻の「国際絞り学会」での活動、環境デザイン学科の「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」、よみうりランドケアセンターにおける浴室壁画制作「高齢者のいやし空間に関する研究」、八王子市教育委員会パワーアップ講習会への講演・実技講座の協力等々、全ての学科において多様な社会貢献を多数行なって来た。



東京国際ミニプリントトリエンナーレ

CD-ROM 特別



木との語り展（聖路加病院）

§現状報告・評価§

1. 生涯学習センターの活動

< 目 標 >

本学では、子供から大人まで全ての人々に美術・芸術の自由な拡がりを開放しようと 2000

年度から生涯学習プログラムをスタートさせた。

2002年度には「生涯学習センター」を設立し、センターを通して更なる活動を拡大している。

本学の生涯学習は、単に高度かつ専門的な再教育の機会を提供することにとどまらず、芸術に携わる者の使命として、人々と歩みを共にし、真の意味での日常に息づいた文化を創造していくことを目的としている。

既存の価値観が混沌とした現代にあって、<美術＝人類の持った特別で良質な“あそび”>を楽しむ道筋のなかで、実際に見て触れ、感受し、思考しながら、自らで発見していくといった<生々しい視点>を共有し、来たるべき時代の新たな指標と可能性を発信していきたいと考える。



受講風景（生涯学習センター）

生涯学習センターの最大の特徴は、社会人のみならず子供も含め、年齢や職業、経験に関わらず全ての人に開かれているということであろう。

殊に、子供講座は本活動のひとつの大きな柱となっており、他では見られない特徴ある試みと言える。夏休みに実施されている『好奇心の学校 多摩美術小中学校』シリーズや、

土曜日を中心に行われている講座には、年間延べ約 1,400 名もの小中学生がキャンパスを訪れ、美術を様々な角度から楽しんでいる。

本学の講座は、子供に限らず成人であっても、特に初めて美術に接点を持った人がその「始まりの愉」に触れ、自らの手で美術と接していくことができるように構築されている。そのため、単にものを作るだけでなく、見ることや考えることといった柔らかな動作の境域の中で、美術に接することができる場の実現を目指している。

そしてそれらの試みが、学部の授業等では実現しにくい、生涯学習ならではの柔軟な形で、従来の固定化された方法へ新たな挑戦になることを目指している。そのためのアプローチの方法として、芸術全体を広く視野に入れた柔軟かであそびのある視点、講義と演習・鑑賞を組み合わせた総合的手法による探求、1 テーマを複数の講座群からアプローチする編成、また既存の分野・学科を超えた横断的な内容などによって、より本質に迫るための方法を模索し、常に新鮮なプログラムの提供に努めている。

< 現状報告・評価 >

講座数・受講者数の推移

2000 年度に年間 40 講座で始まったプログラムは、2003 年度には 143 講座にまで拡大した。年間の延べ受講者は、2,491 名（2000 年度）から 4,363 名（2003 年度）と 1.75 倍の伸びを示している。

殊に子供講座においては講座数の伸びが 3.8 倍であるのに対し、受講者数の伸びは 6.9 倍と、子供の美術教育に対する要請と期待とがうかがえる。実際、2003 年度には子供対象の講座数は全体の 2 割強でありながら、申し込み者数は子供が一般を上回ることとなった。また、この 4 年間での講義系講座の質量ともの充実ぶりも顕著である。

このように特徴あるプログラムは、2002 年のセンター設立時、プログラムの企画に関して総合プロデューサーの配置と教員らによる企画会議の設置が行われたことによって可能となった。この 4 年で本学の生涯学習活動の方向性のひとつが示されたと言って良い。

講座構成（以下 内は 2003 年度データ）

1 年を春・夏・秋・冬の 4 期に分け、上野毛、八王子両キャンパスで主に開講されている。9 割 が上野毛キャンパス開講であり、これは、交通が比較的便利であること、学部授業が主に夜間に行われるため昼間のスペース利用が可能なことなどによる。

講座の形態も多様で、1 回完結あるいは短期集中型の講座が 約 4 割、週 1 回または隔週で全 3 ~ 20 回程度の連続型が 約 6 割 の他、開設当初から続く連続講座などもある。

大部分が小規模教室で行われ、講義が主のもの 33%、演習が主のもの 67% となっており、その他に年 2 ~ 4 回開催する講演「芸術と人生」シリーズ（受講料無料）も 11 回を数えた。

時間帯も平日・土曜、昼間から夜間まで、あらゆる受講生の要望に応じ、気軽に受講できるようなシステム構築に努めている。

講師構成

講師は専任教員 59%、非常勤教員 11% の他、大学外で活躍される方を招いての

講座もプログラムの充実に貢献している。

受講者構成

年齢構成は、15歳以下が42%を占める。一般講座では40～60歳代が中心であり、男：女比は3：7と女性が多く、殊に平日昼間の講座では顕著である。受講生の居住地はキャンパス周辺の東京都区南部、横浜・川崎市、多摩地区で84%を占めるが、遠方から通学する熱心な受講生も多い。

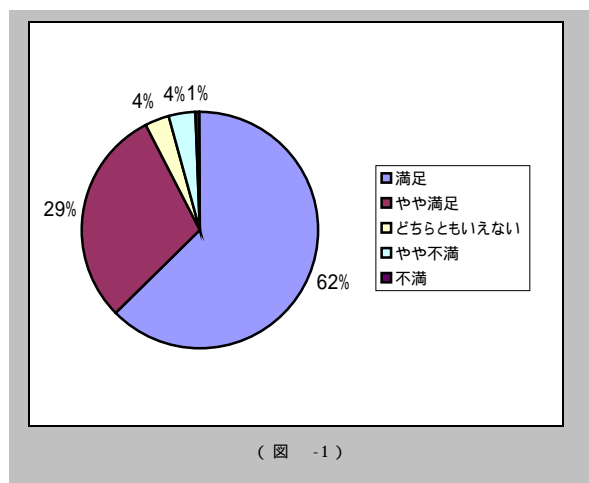
学生・卒業生とのリンク

講座運営にはアシスタントなどとして学生の協力もある年間約200名。学生らにとって一般の方との交流は、大学で学んだことを活かせる場であるのみならず、授業とは違った貴重な経験を得る機会にもなっているようである。また、センターでは講座を学部授業と連動させて行うなど、学生へも成果を還元できる形を試みている。学生の中には、学部授業のほかに生涯学習講座を受講することで、専門分野以外へ眼差しを広げる助けとして活用している者もいる。

さらに卒業してからも、講師として協力を得るだけでなく、美術から遠ざかっていた者が再び制作や学習を始める場として利用したり、親となった若い卒業生が子供を受講させたり、あるいは学芸員や教員として働くなかでワークショップ運営の研究のために見学に来られたりと、卒業生が再度大学へ関わりを持つ場としても機能している。

受講生の意見

Q1. 講座の内容に満足ですか？



2003年度秋期・冬期講座受講生から無作為抽出した400名への調査結果が図-1の通りである(回答率42%、子供講座は保護者が回答)。

内容には概ね満足であるという回答が多かった反面、設備・施設面や、講座の設定方法には改善要望が見られた。

Q2. そのようにお感じになったのはどのような点ですか(自由記述、回答数が多かったものを抜粋)

(満足している点)

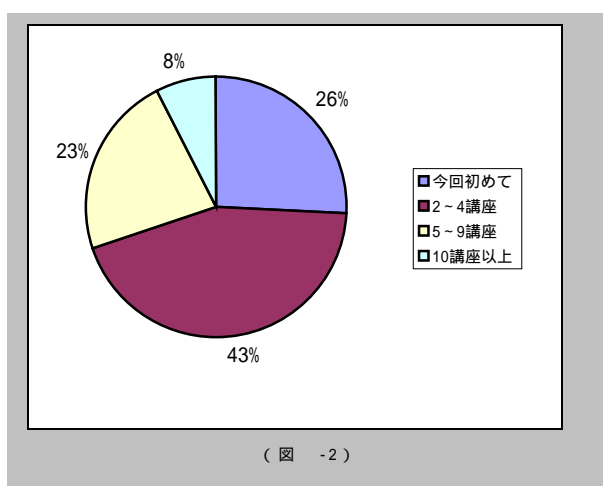
- ・熱心な教え方や質問の受け方など、講師やアシスタントの人柄・対応がよい(38名)
- ・散策や課外授業は、内容が充実していた(19名)
- ・カルチャーセンターとは充実感が違い、美大で学べた、教授から教えてもらえたことは大きな収穫(16名)
- ・〔こども〕帰ってきたこどもが話をする・作品を眺める・続きをするなどとても楽しそうにしていた(15名)

- ・初心者でも丁寧に指導してもらえた(9名)
- ・講義はビジュアル素材が多く分かりやすい(8名)
- ・〔こども〕学校や家庭とは違った体験であり、素材などに対する新たな発見ができた(8名)
- ・強制したり、個性を曲げることがない自由な雰囲気(7名)

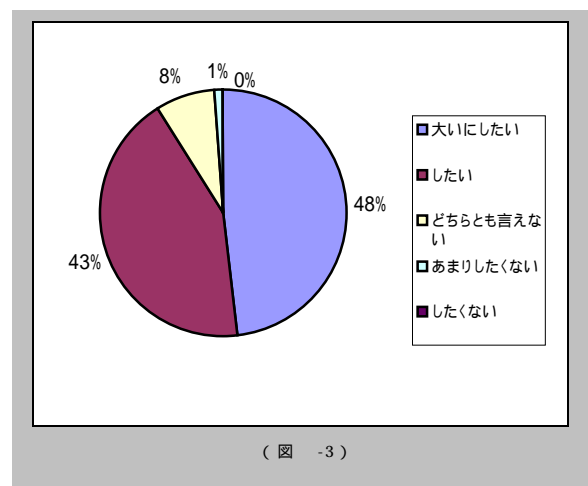
(不満・改善してほしい点)

- ・継続して受講できるようにしてほしい(21名)
- ・大学の施設や、実習機材、講義時のプレゼンテーション機材に不満(19名)
- ・講座の時間・回数が不足(13名)
- ・年間を通して開講してほしい(10名)

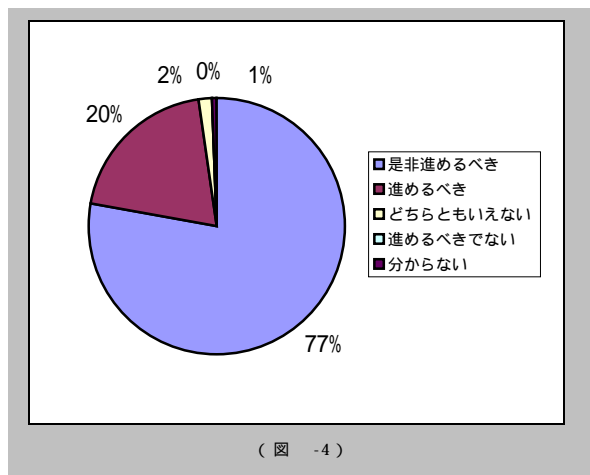
Q3. 今まで本学の講座をいくつ受講しましたか？



Q4. また何らかの講座に参加したいですか？



Q5. 多摩美術大学の生涯学習センターをはじめ、大学を社会に開放することをどう思いますか？



< 課 題 >

この4年間は、本学の生涯学習活動の創成期であり、ひとつの基盤はできあがったと言える。今後とも、美術・芸術本来の自由さや拡がりを持つコンテンツを発信し続けていくことが第一の課題となるであろう。

その他に、それら講座での試みを、記録や報告としてまとめ、学内外で資源として活かせるような形にしていくこと、地域の文化拠点として、美術館などの文化施設や行政、民間などとの連携の方策を探っていくこと、有職者など新たな受講者層の開拓と講座の可能性を探ること、などが具体的な課題として挙げられる。

今後とも、大学の多層な教育チャンネルの一つとして、一般社会人、子供、在学学生を問わず、好奇心旺盛な全ての人々と大学とを繋ぐもう一つの「回路」として、柔軟な教育活動を展開していきたいと考える。

2. 産官学共同研究

< 目 標 >

マルチメディアの研究開発教育を目的とするメディアセンターの活動の大きな柱のひとつが、産学官共同研究である。

本学にとって、生産、表現、伝達、情報などの分野における技術や手法の進歩・変化に対応し、あるいは先取りして研究開発教育を進めていくことは非常に重要なことである。また、本学で開発・創作した新しい技術や手法を社会に還元していくことが求められている。そのためには、企業や官庁との共同研究を通して、日進月歩、加速度的に進む技術・手法の開発・創作を追及していくことが必要である。また、第一線の専門家との相互刺激を通して学内を活性化し、知識や技術の発展・向上をはかっていくことが必要となる。

< 現状報告・評価 >

2003年度において産官学共同研究の総数は21件・5研究室が関係した。そこには多くの教員・学生がその研究に携わった。その研究分野は多岐に渡っており、その研究の特徴も多様である。

ここでは2003年度に行われた産官学共同研究について幾つかの事例を紹介することにする。まず始めに環境デザイン学科の場合を挙げると、プロセスを大事にして教員がプロジェクトのモチベーションを高めつつ、実施に向けたしっかりとしたサジェッションを行いマネージメントして行くという教員主導の進め方を行っているのが特徴となっている。情報デザイン学科においては、共同研究先からは先端的なテーマが提示されており、NECとのロボット研究は、「対話する」ロボットのデザインというデザイン系の他大学に類を見ない先端の研究テーマもある。また、ATM研究画面での広告の研究については、銀行への各種規制撤廃後をにらんだ、今の時代ならではの時宜を得た研究テーマなどもある。

変わったところではグラフィックデザイン学科は、街の景観整備にむけて地方自治体との取り組みを始めている。建築物と屋外広告物の色彩の現況把握と問題点を抽出し、景観整備の方針と基準の策定を行うことである。

さらに環境デザイン学科の別なチームは、高齢化社会というテーマに取り組んだ研究もあり、シニア体験に始まり、高齢者の家庭への聞き取り調査、生活実態調査、長寿社会研究所の見学及びレクチャー等々、設計前の入念なスタディーを通して「老いと住まい」を提案する。

< 産官学共同研究の活動実績 >

2000 年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	(株)日立製作所デザイン研究所	デザイン	植村朋弘	「モバイル情報機器における愛着のデザイン」に関する研究
2	松下電工(株)	生産デザイン (フタバ外)	和田達也	バーナクル&グルミクデザイン
3	イーストマン・コダック社			The Digital Future: Sharing, Memories, Expression
4	(株)日南			時計

2001 年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	(株)サムソン 横浜研究所	生産デザイン (フタバ外)	岩倉信弥	Digital Convergence + harmony
2	富士写真フイルム(株)デザインセンター			Imaging & Information Next
3	(財)中小企業総合研究機構			眼鏡及びその技術を応用した特定分野の新製品の開発
4	(財)中小企業総合研究機構			「有田焼」のデザイン研究開発
5	(株)ソース・ラボ	デザイン	植村朋弘	画面上における知財空間のデザインに関する研究
6	日本電気(株)マルチメディア研究所	情報デザイン	須永剛司	人とロボットのあいだのインタラクション・デザインに関する研究
7	日本電信電話(株)NTTコミュニケーション科学基礎研究所			情報デザインの設定手法による情報共有交換機構の適用システムの研究
8	(財)中小企業総合研究機構	生産デザイン (テキスタイル)	高橋 正	「秩父ちぢみ」の季節限定商品から開放するデザイン研究開発
9	(株)大林組 技術研究所	共通教育	高橋周平	エコメント型防風装置のデザインに関する研究
10	(株)タイムクリエイト	環境デザイン	田淵 諭 岸本 章	サウストリート・アウトドアファニチャーの提案
11	(株)モスフードサービス	環境デザイン	田淵 諭 松澤 穣	新しいモスバーガーの提案
				・店舗の提案
				・システムの提案
				・ファニチャーの提案
12	三井ホーム(株)長寿社会研究所	環境デザイン	毛網毅曠 田淵 諭	エコバーサルデザインに関する提案 ・高齢者の戸建て住宅 ・地域の高齢者の共同施設

社会貢献

				・コミュニティセンター
13	京王電鉄(株)	情報デザイン	吉橋昭夫	工事現場用仮囲いにおける意匠の提案および実施の研究
14	(株)博報堂インフォグラフィクス			M-stage musicホタル検証に関する研究

2002年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	松下電器産業(株)パナソニックデザイン社	生産デザイン (プロダクト)	岩倉信弥	10年後の衣食住における未来家電の提案に関する研究
2	(財)中小企業総合研究機構			福井県鯖江地域での新しいデザインとEYEウェア-新商品の開発
4	(財)中小企業総合研究機構	環境デザイン	岸本章	有田プロジェクト-有田焼への提案-
5	日本電信電話(株)NTTコミュニケーション科学基礎研究所	情報デザイン	須永剛司	情報デザインの設計手法による情報共有交換機構の適用システムの研究
6	(株)マキングマシックス	生産デザイン (テキスタイル)	高橋正	高耐候性熱色システム「GRADESS」の用途及び新規市場開発並びに実現可能な画像表現(デザイン)及び使用素材の拡張
7	社会福祉法人誠美福祉会誠美保育園	環境デザイン	田淵諭	誠美保育園園庭改修工事 設計・管理業務
8	富士シティ(株)		松澤 穰	新業態店舗デザイン開発
9	三井ホーム(株)	環境デザイン	田淵諭 平山 達	高齢者の暮らしと生活空間に関する提案
10	(株)東芝デザインセンター	情報デザイン	原田 奏	東芝科学館 Web サイトコンテンツ開発
11	日本電信電話(株)情報流通プラットフォーム研究所	情報デザイン	吉橋昭夫	InfoLeadを用いた情報検索の研究
12	京王電鉄(株)			大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究
13	日本電気(株)マルチメディア研究所			人とホタルの間のインタラクションデザイン (2)

2003年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所	情報デザイン	楠 房子	子供向けビジュアル言語の研究
2	オリンパス光学工業(株)映像システムカンパニー	情報デザイン	須永剛司	デジタルカメラの操作性向上に関する研究
3	日本電信電話(株)NTTコミュニケーション科学基礎研究所			インタラクションデザイン手法および関係性指向コミュニケーションメディアの研究
4	(株)日立製作所 基礎研究所			インタラクションデザインの研究

・社会貢献

5	沖電気工業(株)金融ソリューションカンパニー金融ソリューション第一本部			情報デザインから見た次世代金融営業店の情報空間(の設計)に関する研究
6	(株)マキシングマシン	生産デザイン (テキスタイル)	高橋 正	昇華転写プリントシステム「GRADESS」の市場開拓の可能性を探る
7	日本コカ・コーラ(株)	グラフィック デザイン	田口敦子	アイテアリスプロジェクトに関する研究
8	川崎市まちづくり局計画部街なみデザイン課			川崎駅周辺環境対策検討調査(市役所通り色彩ガイドライン作成)
9	(株)スリーエフ	環境デザイン	田淵 諭 松澤 穰	新業態店舗デザイン開発
10	スリーエフ・オンライン(株)			情報端末のコンテンツ企画委託について
11	江戸川区 産業振興課			江戸川区と他美大と連携し伝統工芸産業を育成する
12	(株)NECデザイン	情報デザイン	原田 泰	技術情報公開のためのコンテンツ開発に関する研究
13	(株)毎日新聞社 総合メディア事務局			Mqbic システムによるデジタルマンガプレーヤー開発とまんがタウンウェブサイトにに関する研究
14	(株)毎日新聞社 総合メディア事務局			甲南大学ビジュアルデザインに関する研究
15	三井ホーム(株)	環境デザイン	平山 達	高齢者の暮らしと生活空間に関する提案
16	日本電気(株)マルチメディア研究所	情報デザイン	吉橋昭夫	人間とロボットの間インタラクションデザイン(3)
17	京王電鉄(株)			大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究(2)
18	沖電気工業(株)			現金自動取引装置(ATM)における伝達メディアとしての効果的表示方法に関する研究(ATM画面による情報提供に関する研究)
19	(株)東芝研究開発センター	生産デザイン (プロダクト)	和田達也	10年後の家庭の中で心を通わすスマートホームのデザインに関する研究
20	(株)本田技研研究所			10年後の新しい生活における未来モビリティの提案に関する研究(「日々を楽しくするモノ2015」に関する研究)
21	(株)リコール人間科学研究所			プレーヤーの後環の機構開発に関する研究
22	(社)福井県眼鏡協会			平成15年産・官・学共同による新デザイン・新機能アイウェアの研究開発事業

表 -1

学生にとっても、研究活動の過程を通して触発され、第一線の専門家の指導を受けながら自分の発想を具体化するために必要な知識や技術を習得し、自己の専門性を高めていく機会を得ることができる。これまでの本学の産学官共同研究活動はいくつもの優れた成果をあげてきており、企業等に高く評価を受けている。さらに、地域開発や産業の啓蒙に関

わる研究は地域の活性化や地域産業の発展に大きく貢献をしている。

実際、社会と関わりながらデザインや制作をすることで、大学教育では経験できない様々な判断や創造性を要求され、それに答えるべく、知力体力をフルに使っている。

相手先が自治体であったりする場合はその地域の社会的問題までも把握することとなる。学内の課題制作では起こりえない様々なトラブルや、外的な要因に振り回されることも多いがむしろ、それこそが実社会でのデザイナーの仕事の現実である。それらに立ち向かい、解決しようとする姿勢や、苦労の後に研究プロジェクトを成功に導いた時の学生の達成感とそれによって得た自信は、まさに得難いものとする。

また、パッケージデザインの研究を進めたグループにおいては、企業担当者のオリエンテーションを受けたりして、マーケティングコミュニケーションの概念を理解し、実践する機会を与えられ、緊張感の漂う制作過程を体験し、プレゼンテーションに対する認識の变革もあった。

関係各位からは総じて高い評価をいただいているようである。特に、学生の「大人としての」きちんとした対応について、学外の方から「素晴らしい」という驚きの声を聞くことが多い。担当教員からは大学で授業を通して知っている学生の「なんとなく頼りない」姿とは、180度異なっており、そのことにしばしば驚かされるという言葉も聴かれた。これも社会で学ぶ効果ではないだろうか。実際、研究成果においても様々な学会において高い評価をいただいている。

< 課 題 >

近年、知的所有権に関して、これまでに増して、企業は敏感になっている。共同研究の契約についても、この点で「議論」になることが非常に多い。また、企業側には、特許の専門家や法務部があり、専門的な書面や契約内容を提示されることがほとんどであるが、本学の現在のシステムではそれに対応できていない。特許の共同出願を持ちかけられるケースもあるが、出願費用・維持費用は大学負担しない基本原則がある為実施がままならない状況にある。研究のための緒条件を、どのようにして、より研究に有益で有利なものにできるか、研究の「成果」をどのように権利化するか、どこまで大学の権利として主張・確保するのか、など、現場の教員レベルでは判断が困難な局面に頻繁に出会っており、大学としての基本的な考え方や、制度整備、マンパワーの確保などの対応を早急に望まれる。また、環境デザイン学科では積極的にカリキュラムに取り込み実践し、成果を上げているが、学生を前面に押し出して取り組む産学官共同は、今後さらに学内での連携を深め、共に産学官共同という枠内で学科をこえたカリキュラムとして進めると良いのではないかと。

3 . 附属施設の活動

附属メディアセンター

< 目 標 >



メディアセンター全景

メディアセンターには分野の異なる6つのセンターが集まって運営されている。上野毛メディアセンターを除きセンターごとに専門小委員会が設置かれ、運営・活動について随時審議され専門領域に応じ運営方針が決められている。

研究センターは、学内・学外とのコラボレーション、学内の共同プロジェクトや共同イベントの企画を行い、広く他大学や企業、諸組織

との共同研究などを推進している。情報センターはネットワーク施設の維持保守、利用状況の監視、障害解析、ユーザー管理やトラブル対策を中心としたネットワークの円滑な管理運営を行っている。映像センターは映像機器・施設の管理、点検、利用者への機材貸出し及び技術的サポートを行っている。写真センターは写真機材・施設の管理、点検、利用者への機材貸出し及び技術的サポートを行っている。別棟の工作センターは工作機械の管理の他、安全に使用するの為の基礎・技術講習を開講しており施設は授業、卒業制作、産学官共同研究等幅広く利用されている。また、上野毛メディアセンターは上野毛キャンパスにおいて映像スタジオ、講堂、写真スタジオ、メディアセンター講義室を管理している。

< 現状報告・評価 >

メディアセンターは美術系大学としては初めて全学共通利用できる施設として設計されその目的を達成する為以下のような特徴の有る施設が設置されている。

・メディア・ウォール：

アート、デザインの100年の流れをオーディオ、ヴィジュアル、オブジェ、オリジナルのプロダクト、パネル、写真等の複合的なプレゼンテーション・システムを用いて多角的に展開した常設パノラマゾーンである。

・メディアホール



187 m²の広さをもつスタジオ・調整室とで構成され様々なイベント、シンポジウム、撮影、上演、講演、などのプログラムに対応できる多目的施設である。

・メディアルーム



上野毛キャンパスと直結するヴァーチャルデザインスタジオを持ち、新しいスタイルのCSCW（コンピュータ・サポータード・コラボレーション・ワーク）による創造と実験もめざしている。通常は一般的な視聴覚授業に利用できる。150インチのリニアプロジェクションシステムを採用。

・コンピュータスタジオ

コンピュータ・リテラシー教育を目的として設計されている。2階メディアプラザ内の出力ショップからアクセス可能なため、学生はMOなどのリムーバブルメディアでデータを持ち歩くことなく、作品などをメディアセンター内で出力することができる。

・3DCGスタジオ

3DCGスタジオは、映画、ゲーム等で多用されている3DCGを、表現手段の一つとして取り入れることができる環境と講座を、全学生に対して提供している。

・デジタルアーカイブルーム

学内教員作品、学生作品、卒業制作品の情報蓄積だけにとどまらない、独自の情報蓄積（AV情報・電子図書館）を行う。

・共同研究室

各学科間の共同プロジェクトや共同イベント、各教員間の共同研究だけにとどまらず幅広く外部との産学共同研究プロジェクトなどの共同事業を促進する拠点である。個別ブ

ースや多目的オープンスペースである。

・暗室スタジオ



各々20の引伸ばしブースを持つ白黒プリント暗室とカラープリント暗室があるほか、大型引伸暗室がある。

・撮影スタジオ



5.5m幅の白 Horizont 1面で、主光源はタングステン光を採用している。複写スペースも併設している。

・メディアプラザ

パソコン本体や周辺機器、ソフトウェア、デザイン材料、画材などの販売からコンピュータースタジオからダイレクト利用可能な大判出力、カラーコピー、印刷、パネル加工などのサービスがあり、また、自由に利用できるインターネットカフェも設置されている。



・別棟工作センター

木材機械室、樹脂機械室、金属機械室、塗装機械室に分れ機械工作機（マザーマシーン）が設置されている。

工作センターは2002年6月1日から世田谷区、瀬田文教サミット、多摩美術大学との

三者協力事業、交通安全ネームプレートの制作プロジェクトに参加している。2003年1月28日瀬田地区に15作品を設置し、2003年度新たな道のプロジェクトが進行している。地域活動としての「通学路の環境を整える名板作り」関連としてスタートし現在に至っている。産経新聞、日本工業新聞、テレビ東京など多くのメディアに取り上げられている。

多摩美術大学美術館

< 目 標 >



多摩美術大学美術館全景

多摩センター地区への移転・開館

美術館は1999年より準備を進めていた東京都多摩市の中核開発地域である多摩センター地区への移転を行い、多摩ニュータウンの中心的なターミナル駅である多摩センター駅前に同地区としては唯一の美術館として2000年4月1日にオープンした。

この移転については、当初八王子キャンパス計画において新美術館の建設計画も存在していたが、大学の社会貢献、地域参加の拠点として、より多面的で実質的な活動や交流を社会で展開し、キャンパス内施設ではなく市街地区での大学活動という戦略的視点から、「駅前」にある美術館施設の取得が実現した。

実際の施設は地上4階、地下1階の5層構造の中規模建造物であるため、著名な大規模公立美術館のようなものとは異なる、大学が運営する美術館としての特徴や理念を活かした運営を開拓することを前提とした。開館当初の段階では、美術系大学が運営する美術館としては稀有な存在であり、

キャンパス外に美術館を有するのは日本で初めての試みであった。また、従来のキャンパス内施設のとくより収蔵品のみならず企画展を開催し、学生に加えて学外からの利用者を誘致する一般公開に力を入れて来た。この市街地区での美術館の運営展開についても、その方針を発展させ、さまざまな美術活動や芸術資料を学生の社会参加のための糧や刺激にしてもらおうと同時に、一般市民に対しても美術大学から発信していく試みが、広く社会における芸術活動の土壌拡大と発展に役立つことを目指している。

なによりも、美術大学における美術館の存在が、大学内部における教育活動という枠を越え、対社会的な大学の使命を明示する重要な機関として機能することは、定常的かつ広域的に大学の存在をアピールすることとなり、そのフィードバックが大学内に、より多くの情報や事業の交流、連携、そして新規展開の可能性など、大学そのものの発展に大きく寄与することも願ってやまない。

キャンパス外施設としての活用

大学施設の一般公開ということを考えた場合、学外利用者にとって、施設へのアクセスは大きな問題

となる。移転前の運営や事業展開においては、まず大学キャンパスまでの移動が、当時としては頻繁かつ簡易に来訪しにくいというイメージが強く、また、キャンパス内においても決してアクセスの良い場所と施設機能があったわけではないため、一般来訪者にはかなりの労力と負担をかけるという課題があった。この点、移転後は多摩センター駅前（徒歩5分以内）の他の商業施設や文化施設の集中する地区に併設されることで、一般利用者のアクセスは飛躍的に負担が減った。また、駅前美術館というイメージは、一般の人たちの生活圏にある文化施設という親近感も増し、美術館への利用者数と理解が増すことが望まれる。

さらに、博物館実習、ワークショップをはじめとする美術館における教育活動は、実地の社会活動の体験や利用者との接点を多く持つことにより、実践的で柔軟性のある学習の機会を提供できる。これは大学や学生、大学関係者の社会参加を促すと同時に、一般利用者にとっても大学機関の活動に参加、体験することで、学術振興の意識（社会における大学の有用性）が高まることも期待したい。

地域社会との連携

美術館が設置される地域や社会にとっては、たとえそれが公立であっても、民間であっても、「美術館」であるという社会的機能からすれば、間違いなく「公共的な施設」とみなされる。そうした観点からも地域に対する美術館の位置づけには、広く地域社会に貢献、供与されるべき文化施設という性格も帯びて来る。

そもそも、大学自体も社会全体の学術振興、発展の集約専門機関として、きわめて公共性の高い機関であるという理念に依拠するので、「大学の運営する美術館」という存在は、公立美術館とは違う意味で公共性も高く、社会的信頼度も大きいと考えられる。したがって、大学美術館は地域社会においては、「開かれた大学」を広くアピールする実践的な機関としての使命や責任を伴うと言えよう。

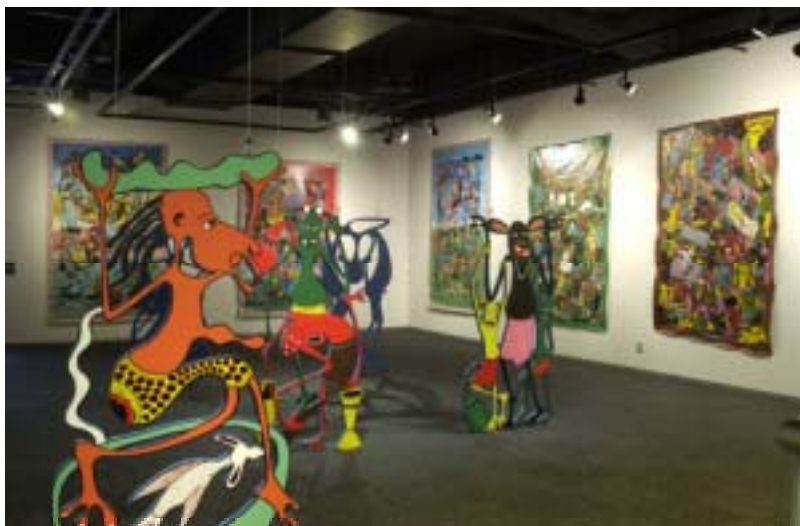
そうした美術館の活動は、美術大学の活動を広く社会に情報や知識を提供するという一面的なものばかりでなく、地域における文化活動や都市問題などについても、さまざまな協力や参加の窓口や、実施場所ともなり得る。それには美術館や大学への協力要請に対応するという社会貢献の受け皿になると同様、地域社会から大学に対するさまざまな支援や供与を有効に活用していく機会を得ることも期待できる。また、美術館や大学からの地域社会に対する提案や働きかけを実現する可能性も大きいと考える。

< 現状報告・評価 >

2000年4月1日の開館より、以下のような展覧会事業を展開してきた。

2000年度

- 「ベン・シャーン展」 人々へ 20世紀から 【4/1～6/25】
- 「サナーヤ・アフリカ！」 現代アフリカ美術に宿るもの 【7/1～9/3】
- 「イサドラ・ダンカン」 モダンダンス・神話から未来への視座 【9/9～10/22】
- 「プリントコンポジション 2000」 多摩美術大学版画の30年 【11/1～11/19】*
- 「インドネシア染織の世界」【11/25～2/25】



「サヤ・アカ！」 - 現代アフリカ美術に宿るもの -

2001 年度

- 「所蔵作品展」 アンティークガラス + 彫刻 【3/18 ~ 7/8】
- 「所蔵作品展」 陶と磁 + 写真 【7/13 ~ 8/26】
- 「ズビネック・セカール展」【9/1 ~ 10/15】
- 「現代ポスターの主潮流とその周辺」 バウハウスからスイス派の巨匠へ 【11/1 ~ 1/14】
- 「オーダブル・ビジョン 1913 / 2002」【1/26 ~ 3/3】

2002 年度

- 「毛綱毅曠」 建築に込められたコスモロジー 【3/16 ~ 4/21】
- 「第3回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展」【4/28 ~ 6/30】*
- 「竹尾ポスターコレクション ポスターでみるヨーゼフ・ボイス」【7/10 ~ 9/1】
- 「重層する 鏡像曼陀羅華 田保橋淳展」【9/18 ~ 10/7】*
- 「意向する繊維」 時の波動 展【10/16 ~ 11/4】*
- 「日韓中教授作品交流展」【11/13 ~ 12/8】*
- 「武田秀雄 漫画展」 今でも描いて遊んでいる 【12/14 ~ 2/9】

2003 年度

- 「所蔵作品展」 日本の古美術 + ベン・シャーン + 欧州版画 【2/19 ~ 4/27】
 - 「子供の王国絵本黄金時代展」 コドモノクニに集った画家たち 【5/10 ~ 6/8】
古河市歴史博物館、盛岡市民文化ホールへ巡回
 - 「松本英一郎展」 Works 1968-2001 【6/15 ~ 6/30】*
 - 「現代の東南アジア美術」 それぞれの視点 【7/11 ~ 9/7】
福岡アジア美術館へ巡回
 - 「木村一生展」【9/14 ~ 9/27】*
 - 「福島誠展」【10/5 ~ 10/20】*
 - 「リヒャルト・パウル・ローゼ展」【11/1 ~ 2/8】
大阪芸術大学博物館へ巡回
 - 「所蔵作品展」【2/15 ~ 2/25】
 - 「多摩美術大学博士課程展」【3/3 ~ 3/14】*
 - 「高木 晃展-多摩美術大学退職記念-」【3/23 ~ 4/7】*
- *印のものは、大学行事としての交流展や退職記念展、特別展等。



「リヒャルト・パウル・ローゼ展」

年間、5～8事業の展覧会を実施し、1年を通してなんらかの展覧会を鑑賞できるよう、利用者に提供しつづけている。開催する展覧会も、広く美術に関係する多様性のあるテーマと内容から企画している。また、企画展以外に美術館の所蔵作品展や大学行事としての国際交流展や退職記念展もおりまぜながら、大学美術館としてのさまざまな特徴や独自性を活かした展覧会を実施してきた。

展覧会実施に伴う、入館利用者数の状況は以下の表（表 -2）のようになっている。

年度	展覧会名	会期	一般	大・高生	招待	多摩美生	その他	合計
2000 年度	ベン・シャーン	4/1～6/25	3,043	728	589	326	274	4,960
	サナーヤ アフリカ!	7/1～9/3	1,904	329	220	80	741	3,274
	イサドラ・ダンカン	9/9～10/22	564	90	122	46	75	897
	Print Composition 2000							
	多摩美術大学版画の30年	11/1～11/19	287	63	354	109	76	889
	インドネシア染織の世界	11/25～2/25	1,464	207	84	68	126	1,949
2000年度 合計			7,262	1,417	1,369	629	1,292	11,969
2001 年度	所蔵作品展 Part. ガラス+彫刻	3/18～7/8	1,281	184	100	118	129	1,812
	所蔵作品展 Part. 陶と磁+写真	7/13～8/26	231	43	4	23	170	471
	ズビネック・セカール	9/1～10/15	314	35	63	121	86	619
	現代ポスターの主潮流とその周辺	11/1～1/14	856	491	268	314	156	2,085
	オーダブルヴィジョン 1913/2002(同時開催:所蔵作品展)	1/26～3/3	438	117	73	40	50	718
2001年度 合計			3,120	870	508	616	591	5,705

2002 年度	毛網毅曠 建築に込められたコスモロジ ー	3/16～4/21	365	107	179	209	85	945
	第3回東京国際ミニプリント・トリエンナ ーレ 2002	4/28～6/30	1,225	230	254	328	251	2,288
	ポスターでみるヨーゼフ・ボイス(同時開 催:所蔵作品展)	7/10～9/1	503	179	72	57	377	1,188
	田保橋淳展-重層する鏡像曼陀羅華	9/18～10/7					951	951
	意向する繊維-時の波動	10/16～11/4					1,368	1,368
	日韓中教授作品交流展	11/13～12/8					769	769
	武田秀雄の世界	12/14～2/9	471	109	45	58	110	793
2002年度 合計			2,564	625	550	652	3,911	8,302
2003 年度	多摩美術大学美術館所蔵作品展	2/19～4/27	278	56	66	47	65	512
	子供の王国 絵本黄金時代展	5/10～6/8	1,537	231	193	200	211	2,372
	松本英一郎展 works 1968-2002	6/15～6/30					1,684	1,684
	現代の東南アジア美術	7/11～9/7	789	158	99	32	597	1,675
	木村一生展-多摩美術大学退職記念-	9/14～9/29					923	923
	福島誠展-多摩美術大学退職記念-	10/5～10/20					649	649
	リヒャルト・パウル・ローゼ	11/1～2/8	820	426	129	482	229	2,086
	多摩美術大学所蔵作品展	2/15～2/25	53	13	4	11	27	108
	多摩美術大学博士課程展	3/3～3/14					405	405
高木 晃展-多摩美術大学退職記念-	3/23～4/7					426	426	
2003年度 合計			3,477	884	491	772	5,216	10,840
2000-2003年度 合計								36,816

(表 -2)

多摩センター地区開館からの入館利用者の推移にみられる傾向としては、2000年度が同地域における新装開館、またキャンパス外の大学美術館という話題性も手伝って、開館記念展で5,000人弱の数値を上げたものの、それ以降は徐々に縮小していく。2001年度、2002年度もやや低迷を続けながら、年度始めや秋の主力となる企画展には増加の傾向がみられた。しかし、これが2003年度になると、年度始めより利用者数はほぼ安定し始め、特に企画展時の利用者数と関心度は促進しているように感じる。また、一般の公立館や商業施設内美術館などで争点となる招待利用者数も決して突出した数値ではない。

この傾向は美術館の立地である駅前地区の利用し易さを、学外利用者が次第に認知、定着させて来た結果と理解している。また、美術大学の運営する美術館としての特徴をアピールする上で、目玉となる定番のコレクション展示などに依存せず、美術大学や芸術分野の多様性をイメージさせる、バリエーシ

ョンに富む企画展の実施をこころがけたことで、観る側の選択肢と未知のものへの興味を誘発した。特に、2002～2003年度にかけては絵画、彫刻などファインアートと並ぶ、もうひとつの美術大学の顔といえるデザインについての企画展にも力を入れたことは、さまざまな反響と賛同を得た。

開館以来3年の期間を経たことで、多摩地域での美術館の存在も定着し始めた。開館当初の物珍しさ的な反応の後、興味本位な来館者の需要はむしろ縮小傾向になり、入館利用者数も一時落ち込みを見せた。これは、美術館の展覧会情報等の広報活動に多額の資金を投与して、商業的PRまで利用しようという路線をとらず、必要最小限の告知手段と公的な広報媒体への情報提供に留め、地道で草の根的な情報提供と利用者誘致を働き続けたことも影響している。しかし、その効果は次第に、近在の住民、多摩センター地区を利用する通勤、通学者を中心に、複数回の来館利用をするリピーターが目立つようになり、来館以外でも、電話、Eメール等での催し物の問い合わせ件数も増加傾向が出て来ている。また、当初より主要ターゲットとしていた実施企画内容を周知した目的型利用の増加とは別に、受付窓口にて、開催、展示内容を確認してから入館する、いわゆる「飛び込み」利用者も目立ち始めている。

同時に、地域における美術館の存在は、単なる来訪だけの目的ではなく、他の美術館やギャラリー、開催中または開催後、予定の展覧会についての情報を問い合わせるケースも増えている。また、美術館、展覧会というテーマに限らず、広く美術に関する情報や知識についての問い合わせや照会について対応する機会も増えている。

これらの状況を鑑みるに、小規模ながら特徴的な企画展を継続するという地道な運営であり、さまざまな商業メディアや広告活動の露出がほとんどない状態のため、絶対的な入館利用者数が他の著名な公立美術館や商業施設内美術館等との比較では見劣りするものの、数値的に現れない細かな反応や反響の積み重ねは、少なからず多摩美術大学美術館の存在と活用を地域社会にアピールする効果を与えていると考えられる。

美術館の来館利用者における美術館認知の浸透に伴い、より広域的な地域参加や社会貢献の機会も増えて来ている。多摩市および多摩ニュータウン地区では、唯一の美術館施設として運営を行っていることもあり、多摩市、八王子市などの自治体や近隣の事業所からの協力依頼や連携申し入れが様々なケースで寄せられている。また、多摩地区に限らず、遠隔の自治体や美術館、博物館、また各官公庁等との連携や協力関係も築かれて来ている。

具体的には、以下のような事例があげられる。

多摩市主催の市民公募展「TAMA デ アート」の企画協力

多摩市複合文化施設（パルテノン多摩）での企画展への協力

多摩センター駅前地区の「いきいき TAMA ふれあいフェスティバル」への参加

多摩センター駅前地区のクリスマスツリー企画協力、紹介（生産デザイン学科）

多摩市多摩センター活性化推進室との連携

京王線駅舎工事外壁デザイン企画協力、紹介（情報デザイン学科）

京王 SC ウェブサイトデザイン企画協力、紹介（情報デザイン学科）

八王子市立美術館建設準備協力

富山県福野町文化施設（ヘリオス）への企画協力

この他、美術館で実施してきた企画展の中でも、外務省の日本アセアン年（2003年度）の文化事業とし

て国際交流基金、シンガポール国立美術館との共催で行った「現代の東南アジア美術」のように各省庁、機関との協力体制の下に推進されたものもある。

美術大学が運営する美術館という特異性と、美術大学の知名度や信頼度もこうしたリファレンス、サポート活動の需要には大きく作用しているが、美術館が単なる作品展示、収蔵という機能だけではなく、そうした基本機能の延長として、様々な情報収集、交換の機能を有することにも起因している。特に美術館は他の大学施設以上に外部に対しての露出やアピール度も高く、大学そのものよりもアプローチしやすいという印象を与えているようである。現状としては、美術館業務として可能な範囲でできるだけ極めの細かい対応と、学内各部署との連携や連絡を心がけている。

< 課 題 >

多摩センター地区にはまだ公立美術館的な文化施設はなく、今後新たな建設の見込みもない状況から、市民や行政側から本学美術館に対する期待は、今後ますます高まるものと考えられる。

大学施設と地域の連携という観点より美術館の立地や地域連携について展望するならば、より地域社会の需要やサービスという考えを考慮した事業展開や対応を行う必要性を感じるが、大学としての自律性や独自性を活かした機軸も重要である。大学美術館が他の商業目的の文化施設とも違い、また運営上の制約を受けやすい官営施設などとも異なるオルタナティブに存在として、地域社会からの信頼や期待を持たれることには、そうした要素も大きく作用していると思われる。

今後も、実験的、拡張的、また基本的な美術啓蒙のため美術展や講座事業の企画運営も推進していくと同時に、更なる対外的な行政や公共機関、民間企業等との提携や協力事業なども推進、着手していくことも検討していきたい。今までの事例同様、美術館での対応という範囲にとどまらず、大学の各部署への橋渡し、連動といった柔軟な対応も必須であると考えている。

その意味では、そうした対応力に見合う美術館運営の体制強化や見直し、様々な外部および学内に対するネットワークの強化も重要な課題といえよう。これはある意味、美術館施設のハード的な側面以上に重要な運営資質となっていくであろう。特にこうした活動には、キーパーソンとなるスタッフや関係者の活動体制や人員配置、業務分担などのバランスや許容量が適切に施されることも重要であり、そのための対策も検討していくべきだと考える。

そうした学外への対応のための学内との連携や理解向上を、学生や教職員全体に浸透させていくことは重要な課題であり、在学生に対する美術館利用の機会の拡大と利用率の向上とともにより大きな効果をあげていく必要があると考える。

また、ミュージアムボランティアや友の会システムの導入といった市民や在学生、卒業生などが美術館の運営に関わる可能性を増やしたいが、受け入れ体制やシステム導入のための設備的状况を十分なものにすることが条件となり、なかなか早急な実現は難しい。その意味では美術館の地域への対外活動という形で、館外での事業展開や公共施設、企業空間へのアプローチも今後とも積極的に推進していく可能性を伸ばしたいが、そこに学内各部署のみならず学生、および卒業生などの大学に関係する有効な人材の活用やチャンスメイキングがあるべきだと考える。

美術館を通して、大学全体のイメージ戦略や社会貢献の中継点としての可能性を拡げるためには、学内的な連携の強化と学生の美術館に対する関心度や利用機会をより拡張することも重要と考える。具体策として、大学カリキュラムやとの連動や様々な研究活動との

連携にも、これまで以上に積極的かつ慎重に取り組んでいきたい。

附属図書館

<目 標>

美術大学の図書館として日々学生および教職員の教育と研究を円滑に進めるため、美術という分野に内包されるあらゆる領域の資料を保存し、提供する。

また、図書館は単に本の貸出のためにだけあるのではなく、必要な情報を得るための機関でもあり、そのための重要な機能である参考業務（レファレンス・サービス）に重点を置き、常に新たな知識と情報を収集し、利用者へ提供する。現在図書館職員一丸となって力を注いでいる。

資料の多くを保存する八王子図書館（八王子キャンパス内）と、上野毛図書館（上野毛キャンパス内）があり、相互に専門分野である美術を中心に歴史的資料はもちろん、最新の資料を収集・保存している。

<現状報告・評価>

八王子図書館

蔵書数：和書約 7 万冊、洋書約 4 万冊、合計約 11 万冊。雑誌約 1,500 種類。

授業で必要となる基本資料から、専門的な研究資料までを含めた幅広い蔵書構成をとっている。特に美術関連の雑誌と外国の展覧会カタログ、作品目録（カタログ・レゾネ）の収集に力を入れており、その他の資料とともに学外研究者の利用も多く、質的に高い蔵書構成をめざしている。



八王子図書館の開架書庫と閲覧室

所蔵数	2001年度	2002年度	2003年度
図書(冊)	110,582	113,753	117,551
雑誌(種)	1,358	1,369	1,526

(表 -3)

貸出冊数(冊)	2001年度	2002年度	2003年度
学生	11,561	15,105	14,623
教職員	1,177	1,607	1,162
合計	12,738	16,712	15,785

(表 -5)

受入雑誌種数(種)	2001年度	2002年度	2003年度
和雑誌	668	634	681
洋雑誌	220	206	203
合計	888	840	884

(表 -7)

貸出利用者数(人)	2001年度	2002年度	2003年度
学生	8,852	10,486	10,266
教職員	544	564	602
合計	9,396	11,050	10,868

(表 -4)

受入図書冊数(冊)	2001年度	2002年度	2003年度
和書	1,711	1,407	1,552
洋書	1,811	1,827	2,313
合計	3,522	3,234	3,865

(表 -6)

上野毛図書館

蔵書数：和書約3万5千冊、洋書約1万冊、合計4万5千冊。雑誌約320種類。
 故瀧口修造氏(1902～1979)の旧蔵書を中核とした瀧口文庫ならびに、故北園克衛氏(1902～1978)の関係資料からなる北園文庫を所蔵している。前者はダダ・シュルレアリスム関連の図書、ポスター、美術品など1万点からなり、後者は小規模ながら北園氏の個人詩集全冊と北園氏主宰の雑誌「VOU」全冊、自筆原稿、自筆句帖を含む貴重なコレクションである。両者ともに戦前から活躍した詩人・美術評論家であると同時に造形作家としても著名であり、近現代芸術研究にとって貴重な資料である。



上野毛図書館の開架書庫

両館とも、それぞれの学部、学科構成を視野に入れた資料の構成を心がけており、更なる資料の充実を図るべく努力している。

外部からの資料の検索を可能にすべくOPACをインターネット上に公開している。現在、そのデータの量は全資料の約7割程度である。全資料をデータベース化するのはもちろん、質の高いデータを利用者へ提供できるようにしていきたい。

また、瀧口、北園文庫のデータベースの一部もインターネット上に公開している。その内容は、1) 瀧口、北園文庫の由来とその概要、2) 瀧口修造・北園克衛年譜、3) 瀧口文庫目録(ダダ・シュルレアリスム専門図書・美術カタログ)、北園文庫目録、4) 瀧口、北園文庫資料の紹介と研究などである。

資料自体の公開も機会をみて行って来たが、今後はデータを充実し、多くの人に利用して欲しい。

2002年4月に相模原市と相互利用に関する協定を締結した。この協定により、相模原市民並びに本学の学生および教職員の図書館相互利用の利便がはかられた。また、この協定は相互の図書館の蔵書構成を補完するものとしても機能しており、公共図書館、大学図書館それぞれのメリットを生かすものとなっている。

< 課 題 >

基本的文献資料としての図書・雑誌の充実を図り、「書籍」という形態以外の資料収集にも努めなければならない。

利用と保存という相反する問題に対応すべく、資料のデジタル化など有効な手段を取り

入れていく必要がある。

従来型の保存図書館としてだけでなく、情報発信型の図書館として、施設、運営両面からの充実をはかっていきたい。

4．高（中、小）大連携

<目 標>



1991年6月の大学設置基準の一部改正により、学生以外の者を科目等履修生として受け入れ、その学習の成果に適切な評価を与えることができるようになった。また1998年12月3日（10教指高第164号）には都立高等学校長の都立高等学校での学校外における学修の単位認定に関する指針が示された。それらにより高大連携の実施の環境が整い、実施がし易くなって来たといえる。

本学は高等学校のカリキュラムの多様化、専門化が進んでいる中、高校での学習を基礎に大学での学習を深めたいという生徒のニーズ、大学の授業を受講することで大学進学の意味を考えさせたいという高校のニーズに対応して来た。実際に高大連携授業を実施している東京都立片倉高校生徒の本学への志願者数は増えて来ている。

社会貢献の視点からも高（中、小）大連携を通して高（中、小）校生自身のニーズを理解し、美術・造形教育の振興に繋がるような息の長い連携が求められていると考えている。

<現状報告・評価>

高（中、小）大連携は始まって間もないこともあり、実績として行なわれた連携授業は片倉高校と鎌水小学校の2校である。

東京都立片倉高等学校との連携

片倉高校造形美術コースの生徒を対象とし、「大学での高度な学習を体験し、より一層の学習意欲と技能を高め、将来の進路について考えさせる一助とする。また高校教育と大学教育との連携教育を促進するための手だてとする」という目的で連携授業が開始された。

2000年3月末より授業内容や授業形態、実施日程等を両校で協議し、2001年度から毎年連携授業を実施している。絵画学科版画専攻が開始当初から実施し、実施形態は実技教科である美術の特性を生かして短期（例年、本学のオープンキャンパス1日と夏期休暇中の4～5日間）で行なわれている。授業内容は高校の施設・設備では学習できない内容を考え、版画や素描の学習を中心に行っている。実技内容についても大学1年生が学習する内容にして、高校では学べない技術の習得ができるよう設定している。

専門性を強くした授業を行ないたいこともあり、版画講座も木版画、銅版画、リトグラフの3版種から高校生が最も体験したい版種を決めることができる。本学でも一つの版種に対し、教授1人、助手2～3人ついてきめ細かい指導を心がけている。

(表 -8 は絵画学科版画専攻と片倉高校間で連携授業を行なった実績である。)

年月日	内容	受入数
2001/7/13.14 オープンキャンパス および 7/27.28	石膏デッサン、木版画、銅版画、リトグラフ	18名(高2.3)
2002/7/13 オープンキャンパス および 7/22.23.24.25	木版画、銅版画、リトグラフ	22名(高2.3)
2003/7/12 オープンキャンパス および 7/22.23.24.25	木版画、銅版画、リトグラフ	9名(高2.3)

(表 -8)

八王子市立鏈水小学校との連携

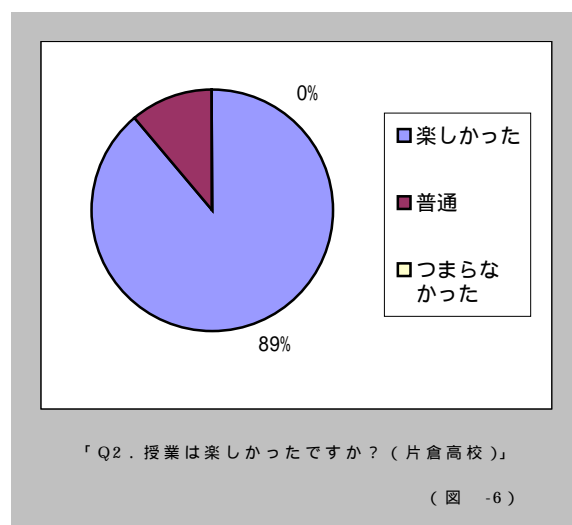
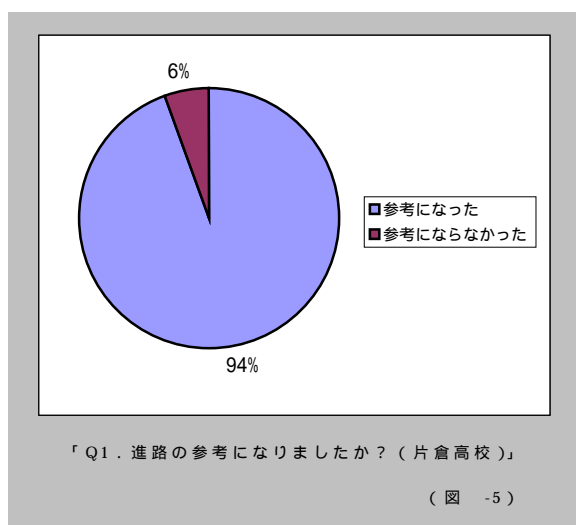
鏈水小学校との連携は、「小学生の創造性支援」というテーマの大学側の研究から端を発した。1999年度に情報デザイン学科より発案、工芸学科、グラフィックデザイン学科、生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻、生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻、環境デザイン学科の共同研究として八王子市教育委員会に協力を求め、同じ八王子市にある鏈水小学校を選定した。当初は大学側から持ちかけた話であったが、交流を進めていく中で小学校側からも要望を示してもらい、双方の目的が合致する形になっていった。つまり、連携の意義をお互いが見つめ直し、新たなメリットを見出していったのである。

大学側としては小学生の創造支援に取り組み、本物の造形教育に触れることによって子供は何を感じるのかを探ることができる。それ以外にも参加学生が小学生の指導に加わることで学生自身が教育・研究効果をあげることができ、また大学の在り方や方向性を再考する機会になった。小学校側からは、高い専門性をもつ大学の造形教育にふれることによって造形教育授業の研究にもなると歓迎された。開かれた学校づくりを進めるため、地域の学校との連携、交流をはかることができたと言える。(2000年度は図 -9の内容で行なわれた。)

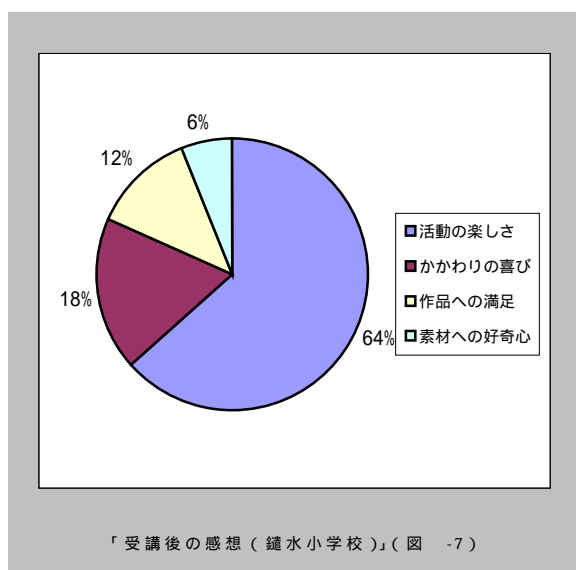
年月日	内容	受入人数	学科
2000/5/12	フェルトを使って	羊毛からフェルトボール、お面を作成する	38名(小5) 生産テキスタイル
2000/6/29	ダンボールのいすの模型作り	段ボールでいすの模型を作り、色つけをする	40名(小5) 環境デザイン
2000/7/5	パソコンを使ったグラフィックデザイン	パソコンを使って移動教室の思い出を写真やイラスト、文章にまとめレイアウトを工夫する	41名(小5) グラフィックデザイン
2000/7/14	段ボールのいす作り	多摩美大のオープンキャンパスに参加する	40名(小5) 環境デザイン
2000/12/14	アニメーションの作成	小学生がキャラクターデザインを作成し、それをもとに大学生がアニメーションを作成する	40名(小5) グラフィックデザイン

(表 -9)

< 課 題 >



片倉高校生徒の受講後のアンケート結果を見ると、大多数の生徒が大学での学習での大学の様子を知り、自らの進路の参考になったと答えている。高校生にとってはこの事業は進路啓発と結びついているのが分かる。(図 -5、6：2001年度片倉高校生アンケート結果)



一方、鑓水小学校生徒の受講後のアンケートを見ると、美術活動の楽しさやかかわりの喜びなどが多いことが分かる。(図 -7：2000年度鑓水小学校アンケート結果)

同様に本学の学生側の意見としても、交流授業によるかかわりの中で、少なからず色々な面で刺激を受けていることが明らかになった。受講生に「教える」という立場を意識することによって環境や発想、意欲、表現方法など、様々な観点で自分の造形活動を、そして自分自身を見直すきっかけになったようである。どちらの連携授業も今後も行なって欲しいとの要望が多く、双方の美術・造形教育への動機づけとなっていると言えよう。

< 課 題 >

連携することの意義は、実際に連携をすすめる中で、様々な立場から検証していくことによって明確になるものであると言える。また、連携が継続・発展していくためには、双方にあるメリットを明確にして、それらを一層確かなものにしていくための努力が必要である。さらにはメリットを当初からねらい（ニーズ）として明確に位置づけるといった、いわば新しいニーズの開発が必要である。そして、片側のニーズだけでなく、双方のニーズがいわば相乗りする形にしていくことが重要な視点になっていくであろう。

§おわりに§

大学の歴史の中で培ってきたもの、知識や表現を広い意味で社会に還元していくことが現代社会における大学の大きな存在意義となって来ている。

これまで多くの発信を本学は進めて来たが、いまだコミュニケーションという意味での情報交通の多くは研究機関と学生との間のものであり、社会へ向けての交通量が活発であるとは言えない。

社会貢献といった活動は、本学の社会における存在意味、その価値を理解してもらうことのほかに、研究機関としての必要性を問うための方法論でもあり、現代社会の中で美術・芸術・文化の重要性を伝え、それらを社会において具現化するための道具でもある。